

大学と地域コミュニティの接点としての開発教育： 九州大学「世界一大きな授業」を事例として

大賀, 哲
九州大学大学院法学研究院 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1498334>

出版情報 : 法政研究. 81 (4), pp.536-548, 2015-03-13. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :

大学と地域コミュニティの接点としての開発教育 —九州大学「世界一大きな授業」を事例として

大 賀 哲

はじめに

1. ワークショップ
2. 参加者
3. 方法の特徴
4. グループワーク

おわりに

はじめに

本稿は九州大学で2014年5月に実施した教育のための世界的なキャンペーン「世界一大きな授業」を事例として、大学と地域コミュニティの接点としての開発教育の役割を再検討することを目的としている。

現在、世界中には学校に通えない子どもが5,700万人、文字の読み書きができない大人は7億7,400万人いると言われている。このこと背景には、紛争や貧困、教育への無理解や女子等の社会的弱者への差別といったさまざまな問題がある。

「世界一大きな授業」はそうした世界の教育の問題や現状、背景となっている社会要因等に注目し、教育の大切さを世界で同時期に考える教育イベントである。「世界一大きな授業」は2003年に開始され、2008年には全世界で885万人が参加しギネスブックに登録された。⁽²⁾日本でも、2013年には684の学校とグループが連携し、6万人

⁽¹⁾ 「世界一大きな授業2014」ウェブサイト参照。http://www.jnne.org/gce/ (なお、本稿における参照ウェブサイトの最終アクセス日はすべて2014年11月4日である)

近くが参加した。日本での「世界一大きな授業」は教育協力NGOネットワーク(JNNE)が事務局となり、2014年は4月21日(月)から5月18日(日)までの間、日本全国でキャンペーンが展開された。

九州大学は2014年に初めて「世界一大きな授業」に参加し、JNNEから提供された教材案に基づいて「世界一大きな授業」のワークショップ(以下、ワークショップ)を計6回(公開講座として4回、箱崎公民館、東箱崎公民館での出前講座としてそれぞれ1回)行った。九州大学のワークショップでは、提供された教材のうち、「アクティビティ1:4択クイズ」、「アクティビティ2-A:識字」、「アクティビティ3:行動する子どもたちのエッセイを読もう」、「アクティビティ5:政策提言をしてみよう」をそれぞれ「教育クイズ」「識字ゲーム」「エッセイを読む」「政策提言」の4つのアクティビティとして行った⁽³⁾。6回行ったワークショップには、地域住民などのべ189名が参加した⁽⁴⁾。参加者は大学生、小・中・高校生、保護者、その他の地域住民、社会人など多岐にわたっていた。ワークショップでは参加者どうしのディスカッションやグループ発表の時間を設けていたこともあり、参加者同士の意見交換や相互理解が活発に行われた。

従来、「世界一大きな授業」については様々な実践報告がなされてきた。たとえば、NGOの教育キャンペーンとしての側面を取り上げた鬼島=白木の報告⁽⁵⁾、教材作成プロセスを詳細に記述した奈良崎の報告⁽⁶⁾、また教育現場の中での実践例としては酒井=星の報告などが挙げられる。しかし、従来の報告はNGOを主体とした開発教育

(2) 「世界一大きな授業」は「教育のためのグローバル・キャンペーン」(Global Campaign for Education)によってGlobal Action Weekとして2003年より実施されている。http://www.campaignforeducation.org/en/を参照。

(3) これらの教材案の名称はJUNEから提示された名称とは異なっている。学外の参加者が多く参加することを想定し、名称を九州大学の公開講座用に変更している。

(4) 東箱崎公民館では5月10日(土)、公開講座は5月11日(日)と18日(日)、箱崎公民館では7月12日(土)に行った。公民館での開催はそれぞれ校区の小中学生と保護者を対象に行い、公開講座では一般の参加者を対象とした。公開講座は1回2時間、1日2回行ったので、公開講座としては計4回行った。また、公開講座の4回は特定非営利活動法人NGO福岡ネットワーク(FUNN)と共催で行った。世界一大きな授業のキャンペーン期間(4月21日から5月18日)に行った5回のワークショップは報告フォームをJNNEに送っているが、箱崎公民館でのワークショップはキャンペーン期間外での実施のため報告フォームは送っていない。

(5) 鬼島美弥=白木朋子「『世界中の子どもに教育を』キャンペーン2003—『世界一大きな授業』に挑戦して」『開発教育』2003年、79-84頁。

(6) 奈良崎文乃「世界一大きな授業2012〜ネットワークの力を活かした国際協力NGOによる開発教育の試み」『』59号、2012年、71-77頁。

(7) 酒井文=星恵子「ギネスに挑戦!『世界一大きな授業』—『女の子への教育』達成を広くアピール!『女も男も』第97号、2003年、22-25頁。

の一側面として「世界一大きな授業」に着眼するか、あるいは初等・中等教育などの授業の一環としてこれを捉えた事例が多く、大学の公開講座のように学校と地域の対話の場として「世界一大きな授業」を位置づけたものはない。実際に「世界一大きな授業」の参加校の大半は小・中・高等学校であり、一般社会人が参加する機会は非常に限られている。したがって、「世界一大きな授業」を一般社会人も参加できる公開講座のかたちで行うことには一定の意義が認められる。本稿では学校教育に閉じた形で行われがちであった「世界一大きな授業」を公開講座のかたちで行った九州大学の事例に着眼し、大学と地域コミュニティをつなげる接点としての開発教育の役割について考察する。

1. ワークショップ

まずワークショップの内容を簡単に振り返っておこう。6回のワークショップは、すべて2時間の時間設定で、同一の内容で行った。①教育クイズ（世界の教育の現状について知るためのクイズ）、②識字ゲーム（文字が読めないことを疑似体験するゲーム）、③エッセイ（現状を変えるために行動する子どもたちのエッセイを読む）、④政策提言（世界の子どもたちのためのランキングと政策提言シートの作成）の4つのアクティビティである。

まずアクティビティ1「教育クイズ」では、クイズ形式で世界の教育の現状について学習し、「世界ではどのくらいの子どもが小学校に通っていないのか?」「世界ではどのくらいの子どもが小学校を途中でやめてしまうのか?」「世界で文字の読み書きができない大人はどのくらいいるのか?」などの問題を「部屋の四隅」形式で一問一答で行った（「部屋の四隅」とは、部屋の4つのコーナーに四択のA、B、C、Dと書いた紙を貼り、参加者が自分の考えた答えの場所へ移動し、なぜそう思ったのか意見を聞くというアクティビティである）。

アクティビティ2「識字ゲーム」では求人広告のワーク（小学校低学年は毒ビンのワーク）を行い、字の読めない状態を疑似体験し、字が読めないと日常生活でどんな支障があるのか、それが毎日続くとどんな不便があるのか、字が読めるようになることでどんな可能性が広がるのか、ということをグループワーク形式で意見交

換をした。

アクティビティ3「エッセイ」では、女子の教育と女性の権利のための活動しているパキスタンのマララ・ユサフザイさんのエッセイを読み、11歳のときにタリバンに学校を破壊され女子の教育のために立ち上がった彼女の活動についてどう思うか、またなぜそう思ったのかをグループで話し合い、それをグループ毎に発表して全体で共有した。

アクティビティ4「政策提言」では、これまでのアクティビティを踏まえて、世界の子どもたちが学校に通えるようになるためには、日本政府に何をして欲しいか、何をすべきであるのかを話し合い、グループごとに発表した。

その後、アクティビティ全体をふり返り、字が読めないことの深刻さと教育の必要性を改めて考えた。「他の方の意見にはっとさせられた。意見交換って大切だなと感心した。」「世界の識字率の低さに驚いた！自分自身の知識の少なさにも…。もっと学ぶ場が必要だと思った」などの意見もあり、今回の「世界一大きな授業」を通じて、世界の教育の現状について知る良い機会となった。

2. 参加者

先述した通り、ワークショップには大学生を中心に地域住民などのべ189名が参加した。内訳は大学生、小・中・高校生、保護者、その他地域住民、社会人等である。九州大学ではとくに参加者どうしのディスカッションやグループ発表の時間を設けていたこともあって、世代を超えた参加者同士の意見交換や相互理解が活発に行われた(表1参照⁽⁸⁾)。

全参加者のうち公開講座参加者が全体の7割を占めている。また、公民館で2回開催したこともあり、小学生の参加者が27%となっている。全体として、大学生、一般の割合が7割近くに及び、学生だけではなく社会人を含め、世代を超えた参加が見られた。この点は九州大学でのワークショップに顕著な点であるといえる。というのは、「世界一大きな授業」は初等・中等教育の学校参加が多く、2013年の参加

⁽⁸⁾ 表1はあくまでもワークショップ参加者の属性を一覧にしたものに過ぎず、公開講座と公民館での出前講座では参加者の内訳は異なっている。

	小学生	中学生	高校生	大学生	一般	合計	割合
東箱崎公民館（5／10）	15	0	0	5	9	29	15.3%
公開講座（5／11）	12	1	1	25	26	65	34.4%
公開講座（5／18）	11	1	3	27	25	67	35.4%
箱崎公民館（7／12）	13	0	0	6	9	28	14.8%
合計	51	2	4	63	69	189	
割合	27.0%	1.1%	2.1%	33.3%	36.5%		

(表1：ワークショップ参加者の内訳)

団体を見ると、小学校・中学校・高校の割合が67%、大学・短大・高専・専門学校が13%、支援学校が1%、塾・その他団体・個人が19%である⁽⁹⁾。このことは、大学生または一般の社会人が「世界一大きな授業」に参加しようと思っても近隣の地域に「世界一大きな授業」を実施している大学や団体がなければ参加することはできないということを意味している。実際、小学校・中学校・高校以外の実施割合は3割程度であるから、大学が公開講座という形で一般に参加者を募ってワークショップを開催することの意義は大きいと考えられる。

また九州大学では、従来から箱崎公民館・東箱崎公民館などの地域の施設と連携して小学生を対象に「貿易ゲーム」などの開発教育を行い、また筑紫野市の吉木小学校とも連携して「水のワークショップ」を行ってきた。大学が地域の公民館や学校と連携して一また今回のような公開講座というかたちで開発教育を行う場合、世代や職業、立場を超えて様々な人々が集う「学びの場」を提供することが可能となり、それによって保護者や地域住民、一般の社会人と子ども・学生を結びつけるという効果が期待され、さらには共通のテーマを議論することで問題意識の共有がはかられる。その意味で、地域から開発教育を発信するセンターとしての大学の役割は非常に大きいものであると言えよう。

⁽⁹⁾ 既述のJnneウェブサイトから2013年度実施の統計資料を参照した。「2013年の参加者の声」
<http://www.jnne.org/gce2014/voice.html>

3. 方法の特徴

今回、九州大学で行った「世界一大きな授業」にはどのような特徴があったのだろうか。その特徴としては次の二点が考えられる。第一は大学生がファシリテーターとして司会進行を行うことによって、開発教育の「受け手」とであると同時に「送り手」としての役割を担っていたことである。第二は参加者どうしのディスカッションやグループ発表の時間を設け、そのことが活発な議論を促していたことである。

第一に大学生がファシリテーターを行うことには、特有の利点と困難がある。今回のワークショップでは、参加者を6人から8人のグループに分け、筆者の国際政治学ゼミナールの学生がファシリテーターとして各グループを担当した。ファシリテーターの学生は事前に教材案を読み込み、内部での打ち合わせとリハーサルをそれぞれ2回行い、ワークショップに臨んだ。参加者が小学生から社会人から多岐にわたる中で、また必ずしも十分な準備時間をとれないこともあり、大学生が司会進行には拙い点があることは否めない。しかし、こうした公開講座を行う上で、大学は高等教育機関として独自の社会的使命を担っている。一方でそれは大学の教育・研究で得られた知見を地域社会に還元するということであり、他方では社会に開かれた公開の活動を行うことによって次代を担う学生を育成するということである。大学が他の機関や地域社会と連携して開発教育を行う場合にはその傾向は一層強くなるが、公開講座には社会に対して開発教育を提供すると同時に、そうした活動を通じて学生を育てる、教育するという側面が強く現れる（企業・行政・NGO等の他の社会機関に比して、一層そうした性質が強くなる可言えよう）。言い換えれば、大学などの高等教育機関が開発教育を行う場合、大学生は開発教育の「受け手」とであると同時に、ファシリテーターというかたちで開発教育の「送り手」ともなっている。企業やNGOが開発教育を行う場合、また教師がファシリテーターを務める場合に比して、学生がファシリテーションを行う場合にそのクオリティは必ずしも高くはないのかもしれない。しかしながら、先述のように開発教育の「受け手」でもあり「送り手」でもある大学生が、地域住民や子どもと一緒にグループワークを行うことによって、通常の受動的な大学の講義によってはなかなか得ることのできない主体性や批判的思考力を涵養することができる。またグループワークという共同作

業を通じて、世代や職業を超えた様々な参加者が集う場で、多様な参加者を結びつける開発教育の「送り手」としての役割を大学生が担うことも期待される。むしろ、開発教育の「受け手」・「送り手」として大学生を捉えることで、学びの場としての開発教育の意義が一層高まるのではないだろうか。ここに未成熟ながら大学生がファシリテーターを行うことの意義がある。

また表2はファシリテーターとして参加した大学生たちの事後の感想をまとめたものである。これは参加した学生に「世界一大きな授業の感想」と、「世界一大きな授業」の参加を通じて自己の問題意識がどのように変わったのかを問うたものである。ここから明らかなことは、公開講座のかたちで行うことによって、多様な年齢層や問題意識をもった参加者が参加することになり、その結果ファシリテーターとして参加者の年齢層や問題意識に合わせた柔軟な対応が求められる、ということである。すなわち、公開講座のかたちを採ることにより、大学生の側からみれば、通常の受動的な授業では得られ難い意見の多様性に触れ、さらに議論をまとめていくために柔軟な対応を創意工夫する必要が生まれる。またそうした話し合いを通じて、大学と地域の連携の回路が広がっていくという可能性も示唆されて良いであろう。

<p>「世界一大きな授業」の感想</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● タイ語を読んだり、ダイヤモンドグラフを考えてみたりと、大学の授業では学ばないことを学ぶことができ、楽しい時間を過ごすことができました。政治的な話題に関しては小学生は少し難しく感じたかもしれませんが、こういった事について考え、みんなと考えを共有する機会をもてたこととはとても有意義だったと思います。 ● さまざまな年代の方と話すことができ、とてもいい経験になりました。 ● 授業を運営する側としての参加だったので、相手の年齢層に合わせて説明の仕方を変えるなどの工夫が必要でした。物事を「伝える」ことの難しさ、奥深さについて改めて知る機会になりました。また、ある程度授業の方向性は決まっているのですが、内容の「押し付け」にしたいくないというのが自分の中にあっただので、参加者の意見を元に授業を作っていくことが面白くもあり、難しくもありました。
----------------------	---

	<ul style="list-style-type: none"> ● いくら教育が大事だとわかってはいても、実行に移すにはその国の政府が動く必要があると思うので、市民レベルだけではどうにもならないこともあると思います。それでも、続けていくことで変化が生じるといいなと思うようになりました。 ● 小学生から社会人までの色んな人と一緒に一つの問題に取り組むというのがとても新鮮でした。 ● 世界一大きな授業というのは、参加する人の年齢層や意識などによって意義が変わってくるものだと実感しました。参加者の方がおっしゃっていたことですが、世界の貧困などについて自分の考えがあったとしても、日常生活の中でそれを真剣に話す場面はあまりなく、また家族や友人などそのような話をするのは何となく気恥ずかしいので、このような場は貴重だという感想を聞きました。このように意識の高い大人の方にとっては、意見を共有する場としての意義があると感じました。例えばいきなり世界の現状について話して下さいと言っても意見が出しにくいと思うので、世界一大きな授業はもともと各人が持っている考えを引き出して、意見交換をする手段として使えると思いました。また、まだ知識があまりない小学生などにとっては、世界でこのようなことがあっているのか！と知って、自分の意見を考えるきっかけとしての意義があると感じました。逆にいえば、取り組む人の姿勢によってはあまり意義が薄いものにもなりうると思うので、形式的なワークをこなすだけではなくて、各人が当事者意識を持ってその一歩先まで踏み込んで真剣に話し合うことで、有意義なものにすることができると思いました。 ● 普段何気無くテレビ等で目にする問題に対し、流すことなく深く掘り下げ、またそれを他人と共有しながら考える機会を持てたことが、とても有意義でした。
<p>「世界一大きな授業」を通じて自己の認識がどう変化したか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 世界では幼い子が政治的な問題に対して関与していることを学び、国際的な事件についてより関心を持つようになりました。 ● 同じ問題に対して人もによって受け止め方は様々であるということを強く感じました。したがって、ある問題について議論する時に自分の考えが相手にとっても当たり前であると決めつけることがないようにしたい、前提の確認を大切にしたいと思いました。

	<ul style="list-style-type: none"> ● たくさんの考えを持っている人がいるんだと感じました。これから、このような機会を大切に、たくさんの人の意見を聞いていきたいとおもいました。小さなきっかけで、こんなに意識が変わるんだとおもい驚きました。 ● 世界では幼い子が政治的な問題に対して関与していることを学び、国際的な事件についてより関心を持つようになりました。 ● 同じ問題に対して人によって受け止め方は様々であるということ強く感じました。したがって、ある問題について議論する時に自分の考えが相手にとっても当たり前であると決めつけることがないようにしたい、前提の確認を大切にするようにしたいと思いました。 ● たくさんの考えを持っている人がいるんだと感じました。これから、このような機会を大切に、たくさんの人の意見を聞いていきたいとおもいました。小さなきっかけで、こんなに意識が変わるんだとおもい驚きました。 ● 大きく何かが変わったわけではありませんが、教育の重要性を改めて感じたのと、同じテーマなのに全く異なる視点での意見を聞いたのが印象的でした。 ● 変わったといえるがわかりませんが、人はそれぞれ違う考え方を持つということを改めて認識した気がします。 ● 変わったというほど大それたものではありませんが、自主的に高い意識を持って世界の現状について真剣に考えている方々がいらっちゃって、ゼミで勉強している自分よりも意識が高いと感じる場面もけっこうあり、その方々のことをすごいなと感じると同時に、国際政治学のゼミに所属しているわりには自分は勉強不足、意識不足なのではないかと反省しました。 ● 根底的に何かが変わったわけではないと思いますが、教科書では感じとれない多くの心からの意見を聞いたこと、また同じ事柄に対してすら一つとして同じ感情がないことに驚きました。
--	--

(表 2 : ファシリテーター学生の事後の反応)

第二に、参加者間でのグループ発表も九州大学での「世界一大きな授業」の大きな特徴であった。これはグループ内で発表者を一人決め、そのグループでの話し合いの内容を全体に共有するという形式で行われた。そのため各グループでは、単に

意見を共有するためにグループ内でそれぞれの考えを言い合うだけではなく、それを第三者に伝えるために、グループ内での意見をとりまとめ、それを客観的に分かりやすく説明する必要がある。第2節で述べたように、今回のワークショップは小学生から社会人まで多様な背景を持った参加者で構成されており、そこで意見交換を行い、それを取りまとめることには大きな意義があったと考えられる。参加者からは、「子どもたちの考えを聞いてよかった。」「他の人の話がきけてよかった。」「考えている人がたくさんいるんだと知ることができてうれしい。」「立場や経験の違いによって、考え方が全然違うと思いました。」「他の方の意見にはっとさせられた。意見交換って大切だなと感心した。」「様々な年齢や職業の方々の意見を聞くことができて、今まで自分には無かった考えに触れることができ、とても有意義な時間でした。」などの意見があった。また、「世界単位で物事を考えることは難しい。一人一人考えてることが違うから。時には考えの論争から戦争になってしまうこともある。だけれども人が集まれば、今まで考えもしなかった視点を聞くことができる。今回のたった2時間に5人で話ただけでも新しい見方を知れました。」といった前向きな意見も聞かれた。

4. グループワーク

最後にグループワークでの議論の内容を詳細に見ておこう。上述のグループワークはアクティビティ3と4で行った。以下ではこの内容を考察する。

(1) エッセイ

アクティビティ3「エッセイを読む」では、マララさんのストーリーと国連でのスピーチを読み、それに対して感じたことを(私の気持ち)とその理由をグループ内でシェアして、さらにグループごとに発表者を決めて、グループでの議論を報告するというスタイルを採った。

表3は、参加者がどの項目を選んだかを示したものである。「すごい」という回答が最も多く(104/24.8%)、次いで「心配だ」(62/14.8%)、「おどろいた」(59/14.0%)、さらに「かわいそう」(50/11.9%)といった項目が多かった。また反面

で、「腹が立つ」(43/10.2%)、「納得できない」(23/5.5%)といった意見は意外と少なかった。

また、「そう思った理由」では、「1人の少女の行動で世界が変わっていくなんてすごい!」「自分も苦しい状況にあったのにちゃんと取り組める強さに感動した」「動き出そうと思った行動力に驚いた」など率直な意見が聞かれた。このことは、マララさんのストーリーを悲しい出来事としてネガティブに捉えるのではなくて、マララさんの行動力や資質をポジティブに評価する意見が多く見られたことを示している。

項目	数	割合
おどろいた	59	14.0%
すごい	104	24.8%
かわいそう	50	11.9%
腹が立つ	43	10.2%
わからない	31	7.4%
心配だ	62	14.8%
自分には関係ない	8	1.9%
納得できない	23	5.5%
わくわくする	40	9.5%
合計	420	100.0%

(表3:「エッセイを読む」で選択した項目)

(2) 政策提言

さらにアクティビティ4では、これまでの議論を踏まえて政策提言を行った。まず、子どもたちが学校に通うために必要なことをダイヤモンド・ランキングで考え、その上で「日本政府にお願いしたいこと」を政策提言として話し合った(ダイヤモンド・ランキングとは提示された複数の選択肢の中から優先順位やその理由を話し合うアクティビティである)。

政策提言の中には斬新な意見が多くみられた。ここではそのすべてを取り上げることはできないので、世界の教育に関わるものと日本の教育に関わるものをそれぞれ紹介する。世界の教育に関わるものとしては、「学校に通う子どもが少ない国の家族を一定期間日本にホームステイしてもらって、日常的に学校に通うことを一家で体感してもらう機会をたくさん作ってほしい。」「内戦やテロが続いている国々に平和解決するように手助けしてあげて下さい。平和になれば、教育にももっと目を向けてくれると思うので。」「議員が教育の重要性を学ぶ機会を作る。」「日本で、仕事がない人に勉強してもらって、他の学校がない国の先生になってほしい。」「外国の

先生を日本で勉強してもらって、学校がない国で働いてほしいです。お願いします。」
「途上国に学校を作って、先生を育ててください。」「小学校を卒業した人で、ゆずってもいい人のランドセルとかを外国に送ってください。」「オンライン教育設備を無償提供。」などの意見が見られた。

また日本の教育に関わるものとしては、「子どもの権利条約を、日本の子どもや大人に学ぶ機会を作ってほしい。」「途上国の現状を学ぶ授業を小・中・高・大で作ってほしい。」「日本中で募金活動をしてほしい。」「学校に通えることの大切さを日本の学校で伝える。」「初等教育のうちから世界の子どもたちの現状を知る授業を！」「透明性のある資金運用。援助について国民の意見を！」「初等教育の時点で世界の子どもたちの現状について知れる機会をもっと作ってほしい。」「国際協力論の教科書化。」などの意見が見られた。

世界に対しては日本国内の教育インフラやノウハウを途上国に提供すべきであるという意見が多く、日本国内の教育については世界の教育の現状をもっと教育過程の中で教示すべきであるという意見が共通して見られた。

おわりに

以上、本稿では九州大学で行った「世界一大きな授業」の実践報告と評価を行った。大学の公開講座または社会連携活動として「世界一大きな授業」を行ったことで二つの顕著な成果が得られたと考えられる。

第一に大学生がファシリテーターを行うことによって、単に開発教育のワークショップを地域社会に対して提供するというだけでなく、ワークショップを通じて次代を担う大学生が開発教育を実践し、その重要性を学び取りながら、主体性や批判的思考力を涵養するという成果が見込まれる。また開発教育の「受け手」でもあり「送り手」でもある大学生がファシリテーションを行うことによって、学びの場としての開発教育の意義が一層高まるものと期待される。このことは世代や職業を超えた様々な参加者が集う場でもある公開講座・社会連携活動ということの性質も強く作用している。

これに関連し第二に、九州大学のワークショップではグループ発表を取り入れて

いたため、年齢や職業など多様な背景を持つ参加者が、ただ意見交換をするだけでなく、話し合った内容を他者に分かりやすく伝えるために意見を取りまとめるという作業を行い、それによって他者の問題意識についての理解や教育問題のアプローチの多様性を学び取ることができた。第一の点とも重複するが、大学生がファシリテーションを行うことで、大学の公開講座が、保護者や地域住民、一般の社会人と子どもたちを結びつける役割を担い、そのことが、地域の開発教育を支え、それを発信するセンターとしての大学の役割を強化することになると考えられる。「世界一大きな授業」を通じて、次代を担う学生を育て、様々な世代や職業の人々を内包する地域コミュニティ結びつけることが可能であるし、大学には教育機関として、そうした地域コミュニティの接点となることが求められているのではないだろうか。